

シリアの辻褄を合わせられない西側メディア

【訳者注】この評者のプーチン評が、ここ一連のこの欄で訳者が試みてきたプーチン評とあまりにも一致するのと、イギリスと日本の事情もほぼ一致するので、これを取り上げてみた。「あなた方は恥ずかしくないのか」というキツイ言い方があるが、この人が英メディアに向かって突きつけるのは、この一言に尽きる。そのからくりは簡単である——西側は自分の非をごまかすために、相手（ロシア）を“悪魔化”する。メディアは身の安泰のために、忠実にそれだけを報道する。この相互扶助の関係の中に、一般大衆が取り込まれる。米・NATO 側は、世界の圧倒的多数を、自分たち犯罪者の側に引き込むことによって、犯罪事実を消そうとする。圧倒的多数の犯罪者が手を組んで、みんなで渡れば怖くない、犯罪にはならない。そのために不可欠の働きをするのが、メディアだということである。

By Tara McCormack

October 17, 2015, Information Clearing House

西側の冷戦プロパガンダを振り返ってみると、その異常さに驚く。恐怖を売りつけるポスターや映画によって、アメリカが、途方もない外国の勢力や、国内の隠れたスパイから攻撃されているという印象を押しつけられた。今日、このプロパガンダを、現実の正確な表象として受け取る知識人はほとんどいない。今日振り返ってみるとき、多くの冷戦プロパガンダが、国内に恐怖の風土をつくり出し、海外の戦争への支持を呼びかけるために、計画されたものだったことが容易にわかる。

にもかかわらず、今日のイギリスの新聞について、最も深く失望させることの一つは、対外政策の問題になると、彼らは実に無批判的に、政府の路線をそのまま踏襲することである。ウクライナ危機以来、イギリスのメディアは、その批判的能力を完全に失い、残りの能力もかなり低下したように思える。知的なアナリストや批評家でさえ、冷戦の教訓を忘れ、冷戦物語の色あせた模倣へと容易く後退している。

しかし、シリアでのロシアの爆撃の扱いになると、イギリスは自分自身をはるかに超えてしまった。シリアでのロシアの爆撃についての報道は、馬鹿げたものから、不正直なもの、かけ値なく驚倒させるものまで、多岐にわたっている。数週前のザ・タイムズの見出しには、「プーチンが西側に挑戦！」とあった。明らかにプーチンは、ロシアの対外政策が、ブリュッセル（EU 本部）とワシントンで、今、操作されているというメモを受け取っていないかつ

た。

プーチンは、Moriarty 教授と Fu Manchu とヨゼフ・ゲッペルスの、かけ合わせのように描かれていて、西洋を煙に巻くための小細工を弄し、底の見抜けない作戦を実行する、名うでの戦略家、悪の天才であるかのような。「彼はシリアで何をしようとしているのだ？」というのが決まり言葉である。最近私は、ジャーナリストで元米外交官の James Rubin と、チェルトナム文学祭で議論したが、彼は、いかにプーチンの底が見抜けないかを言い続けていた。ある種のプーチンに対する、惜しみ惜しみの賛辞が、時たま評論のなかに紛れ込むのも頷ける。

問題は、これが全くのナンセンスだということだ。まず、ロシアが何をしようとしているのか全くわからない、という主張を考えてみよう。これはウクライナ危機以来、続いているテーマだが、これは全くのウソである。ウクライナとシリアでのロシアの動機は、よくわかっている。それがよくわかっているのは、ロシアの曖昧な声明や謎めいた振舞いを読み解く、クレムリン学者チームがいるからでなく、彼の政府の代表として、プーチン大統領は一貫して彼の意図を、西側に話してきたからである。

ところでプーチンの動機については意見が違ふかもしれない。しかしそれは全く別問題だ。肝心の事実、プーチンが彼の意図を隠していないということである。にもかかわらず、メディアはそれについて決して報道しない。ノアム・チョムスキーがかつて、民主国家ではしばしば、物事は白日の下に隠されると言ったが、これは非常によい例である。

同様に、ロシアのシリアでの狙いが何かわからないというのは、全く違う。ロシアは、シリアのリーダー、バシヤール・アル・アサドを長い間支持してきた。しかし決して、アサド以後のシリアに反対しているわけではない。彼らの主たる狙いはシリアの崩壊を防ぐことである。これはプーチンによって公然と述べられている——例えば国連で、また CBS とのインタビューで。我々はそれに同意しないかも知れない。しかしロシアの介入を、なにか悪魔的な、底の知れない計略であるかの言うのは、全く嗤うべきことである。

もう一つ、ロシアのシリアへの介入のインパクトについての、盛んな議論を考えてみるがよい。まさかイギリスのメディアが、外国への爆撃の悪性の効果について、これほど関心があるとは誰も思わなかった。アメリカとその同盟国自身の、長年月におよぶシリア爆撃の報道から考えて、それを予測した者はいないだろう。また英政府が、西側の爆撃に参加したがつているというメディアの議論からも、そんな印象を受け取ることはできない。

英メディアは、シリアへの西側の介入の悲惨な結果については、完全に無視している。西側

はイスラム国の拠点を爆撃する試みをしながら、一方で、アルヌスラ・フロントのようなジハード集団を援助している。シリアでのこの我々の“同盟者”は、アルカーイダとつながっている。我々は完全に正気を失くしたのだろうか？ もっと肝心なことだが、なぜこれが一面のニュースにならないのか？ また忘れないでいただきたいのは、アメリカが、これらの戦闘家を育てるのに5億ドルを費やし、そのうち残った者は4、5名だということである。

「自由シリア軍」というのは、ほとんどフィクションであって、国務省と外交局の想像力の中以外には、ほとんど存在していない。同時に、西側は、この危機の最も嫌悪すべき、破廉恥な行動の一つを、全く放置している——すなわち、唯一首尾一貫した、シリアとイラクのプロ西側の政治・軍事勢力で、IS と戦っている、真に英雄的なクルド人部隊を、トルコが爆撃しているという事実である。

この全く無益で、不正直で、間違っただ、西側のシリア作戦を扱った記事が、どこにあっただろうか？ もしこれに、ロシアの爆撃に当てられた記事の、10分の1でも与えられていたら、イギリスの一般的な政治的議論は、かなり違ったものになっていただろう。英メディアは、ロシアの政治的エリートを、手に負えない、間違いじみたもののように言う。しかし過去20年にわたって西側の対外政策を見てきた者なら、誰でも、西側が冷戦以来の世界情勢の中で、最も安定を破壊する、単一の勢力だったことがわかるだろう。ロシアの国家メディアが偏っているという話を、我々はよく聞く。しかし西側メディアは、自分自身の欠陥をほとんど自覚していない。

(タラ・マコーマックは、レスター大学の国際政治学講師。彼女は *Critique, Security and Power: The Political Limits to Critical and Emancipatory Approaches to Security* (Routledge) の著者、各方面で講演している。)